おぼしめし、勝負にかつうをと、御祝詞なゝめならず、即時酒肴に用ひらる、然におなじき七月上旬、上杉五郎朝定武州へ發向のよし告來る、氏綱出陣、同十五日の夜いくさに、氏綱討勝て武州を治め給ひぬ、其比は四方に敵有て、毎日戰ひやん事なし、氏綱賞翫し給ふ件の鰹は、勝負にかつうをともてはやし、常に支度し、諸侍戰場門出の酒肴には、鰹をもつぱら用ひ給ひぬ、

〔相州文書〕本城御前樣御臺所毎月納肴從昔相定帳面改而被仰出事

魚之代定　鹽にても無鹽にても可爲隨意○略中

一かつほ　壹ッ　代十二文○略中

庚申二月廿三日

國府津之船主村野宗右衞門

〔駿清遺事〕慶長十六年四月廿九日、菴崎ヨリ三澤ノ鄕迄ニ鰹一萬本程寄取之但綱ニテ引也

〔當世武野俗談〕勝間龍水

新和泉町に家主役をして手習指南して、筆名は勝間龍水とて、御府内に名高き者あり、○略中或時母女房寺詣りに行留守なり、折節四月の頃にて初鰹賣來、鰹を呼調へ喰んと直段をす、一貫文に調へしに錢一文もなし、日頃母親信心者にて、持佛堂清にかざり、三具足光りかゞやきける、彼道具を不殘持出し、難波町の仕廻ものやへ賣て鰹を調へ、其近所の俳諧の宗匠平砂湖十買明などを招き、大に舞うたひして樂けり、母親歸て大に驚きなげくといへども、曾て何とも思はずして笑ひ爭はず居たり、希有の男なり、

〔守貞漫稿二十七夏冬〕四月朔日

今日以後初漁ノ松魚ヲ江戸ニテハ特賞之、目テ初松魚ト云、或ハ鰹ノ字ヲ用フ、トモニカツヲト訓ズ、先年ハ一尾價二三兩トス、近年漸賞之コト薄キ歟、價金一二分ニ過ズ、

〔蜘蛛の糸卷追加〕初鰹